第Ⅲ章　台地上の調査（第１次～第３次調査）

第１節　調査の概要

第１次～３次調査は遺跡中央部の台地上から台地斜面を対象とした。調査区は都市計画道路「西仲通線」の計画線に沿うため、遺跡の中央部を南北に縦断する巨大なトレンチを設定したかのようである。調査面積は第１次調査が900㎡、第２次調査が900㎡、第３次調査が1,500㎡、合わせて3,300㎡で、総延長はおよそ150mである（第13図）。

調査区の原状は雑木林がうっそうと茂っていた。このため、久保特定土地区画整理事務所が調査に先立って樹木の伐採を行い、その際には切り株を残して遺構に影響を与えないよう配慮した。

樹木の伐採後は調査区ごとに重機により表土を除去し、調査区内の遺構の精査と並行して基準点となるグリッドを設定した。グリッドは調査区全体を網羅するように設定し、日本測地系（旧）のＸ＝1,420.00m、Ｙ＝－26,400.00m を基準に、５ｍ×５ｍの小グリッドとし、西から東へＡ・Ｂ・C…、北から南へ１・２・３…と呼称する。したがって、調査次ごとに同じグリッド名が重複するため、注意が必要である。

なお、調査の方法は、表土を除去し終えたグリッドごとに精査を実施し、検出された遺構はそれぞれ任意にセクションベルトを設定し、覆土の堆積状況を確認しながら調査を進めた。記録は遺構の平面図・土層断面図・断面図・遺物分布図等の図化を行い、これらと併せて写真撮影を実施した。

（１）第１次調査

第１次調査は平成12年度の12月４日～３月21日まで実施した。調査区は台地の肩部から南方の台地上に位置し、標高は21mである。主な遺構は調査区の中央から北側にかけて縄文時代中期の住居跡が８軒、土坑が15基確認された。このうち、１号住居跡は加曾利ＥⅢ式期、３～６・９号は加曾利ＥⅡ式期、７号住居跡は加曾利ＥⅠ式期、８号住居跡は勝坂Ⅲ式期で、１号住居跡は楕円形プランで長径が約８ｍと大型であった。また、土坑は勝坂式期が４基（SK35・46・74・76）、阿玉台Ⅱ式期が３基（SK42・65・86）、加曾利ＥⅠ式期が４基（SK4・40・63・77）、加曾利ＥⅡ式期が４基（SK34・63・68・92）で、このうち、調査区の東辺から確認された加曾利ＥⅡ式期のSK92は落し穴と想定されるものである。

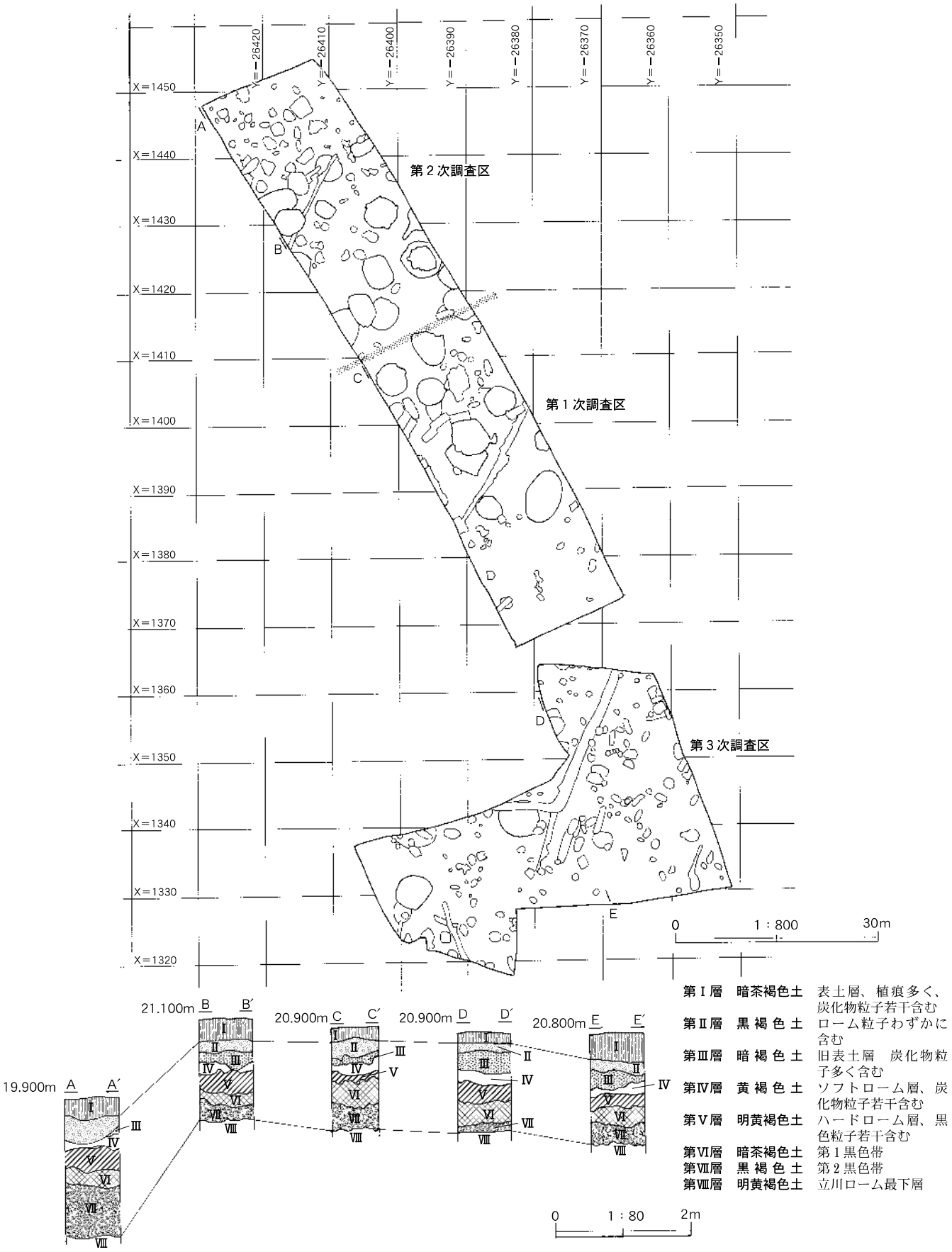
遺物のうち、勝坂式期の８号住居跡の深鉢式土器ではアズキ亜属の圧痕が検出されており注目される。

この他、調査区の北半部では中・近世の溝跡、地下室、長方形土坑等が集中しており、当該期の集落跡の一部と想定される。

（２）第２次調査

第２次調査は平成17年度の９月27日～２月15日まで実施した。調査区は台地の肩部から北側の台地緩斜面に位置し、標高は19m～21mである。主な遺構は調査区の南端から北側斜面にかけて縄文時代中期の住居跡が14軒、土坑が16基、後期の住居跡が１軒、土坑が８基確認された。

このうち、５・７号住居跡は勝坂Ⅲ式期、１～４号、６・10号、12・14号住居跡は加曾利ＥⅠ式期、８・15・16号住居は加曾利ＥⅡ式期９、号住居跡は加曾利ＥⅢ式期で、９号住居跡は柄鏡形住居跡、10号と13号住居跡は入れ子状、８・16号住居等は覆土中に多量の土器を含み、西側から土器が廃棄されている状況を呈していた。また、土坑は勝坂式期が４基（SK35・46・74・76）、阿玉台Ⅱ式期が１基（SK42）、加曾利ＥⅠ



第13図　第１～３次調査区・基本層序

期が５基（SK4・40・63・77・80）、加曾利ＥⅡ式期が４基（SK34・63・68・92）、加曾利ＥⅢ式期が２基（SK65・78）で、このうち８号住居跡の南東から確認された加曾利ＥⅢ式期のSK80単独のは埋甕である。

縄文時代後期の11号住居跡は加曾利ＢⅠ式期の住居跡で、後期の住居跡は第１次～３次調査を通じて唯一のものである。また、後期の土坑は北側緩斜面の下半に分布する傾向を示し、堀之内Ⅰ式期が４基（SK15・20・30・31）、加曾利ＢⅠ式期が３基（SK18・30・34）、加曾利ＢⅡ式期が１基（SK24）である。

主な遺物としては、極小の磨製石斧が３点検出され注目される。

（３）第３次調査

第３次調査は平成19年度の９月２日～11月20日まで実施した。調査区は遺跡の南端となる台地の平坦面に位置し、標高は21mである。主な遺構は中・近世の溝跡、長方形土坑、井戸跡等が調査区の全面に分布している他、調査区の西半部では縄文時代中期の住居跡２軒、土坑１基が確認されている。

このうち、１号住居跡は加曾利ＥⅡ式期、２号住居跡は勝坂Ⅲ式期で、中期集落の南限に位置するものと想定される。

第２節　第１次調査の遺構と遺物

第１次調査の概要については第Ⅲ章第１節で述べたとおりである。第１調査区の全体図は第14図に示した。

（１）住居跡

第１次調査区では８軒の住居跡が検出された。帰属時期は勝坂Ⅲ式期が１軒、加曾利ＥⅠ式期が２軒、加曾利ＥⅡ式期が３軒、加曾利ＥⅢ式期が１軒である。このうち加曾利ＥⅡ式期の４号住居跡と６号住居跡は切り合い関係にある。また、調査当初に２号住居跡と認識した遺構は住居跡ではなく、落とし穴であったため住居番号を欠番とし、92号土坑と設定した。

１号住居跡（第15～17図、第３表）

調査区の中央部、F6・７グリッド付近に位置する。住居跡のプランは長楕円形を呈し、長径7.9m、短径5.5mを測る。主軸はＮ－24°－Ｅを指向する。床面はほぼ平坦で、硬く締まっている。壁は総じて低く10cmほどで、立ち上がりも緩やかである。壁溝はなく、覆土はローム粒子、炭化物粒子を含む暗茶褐色土を主体とする。

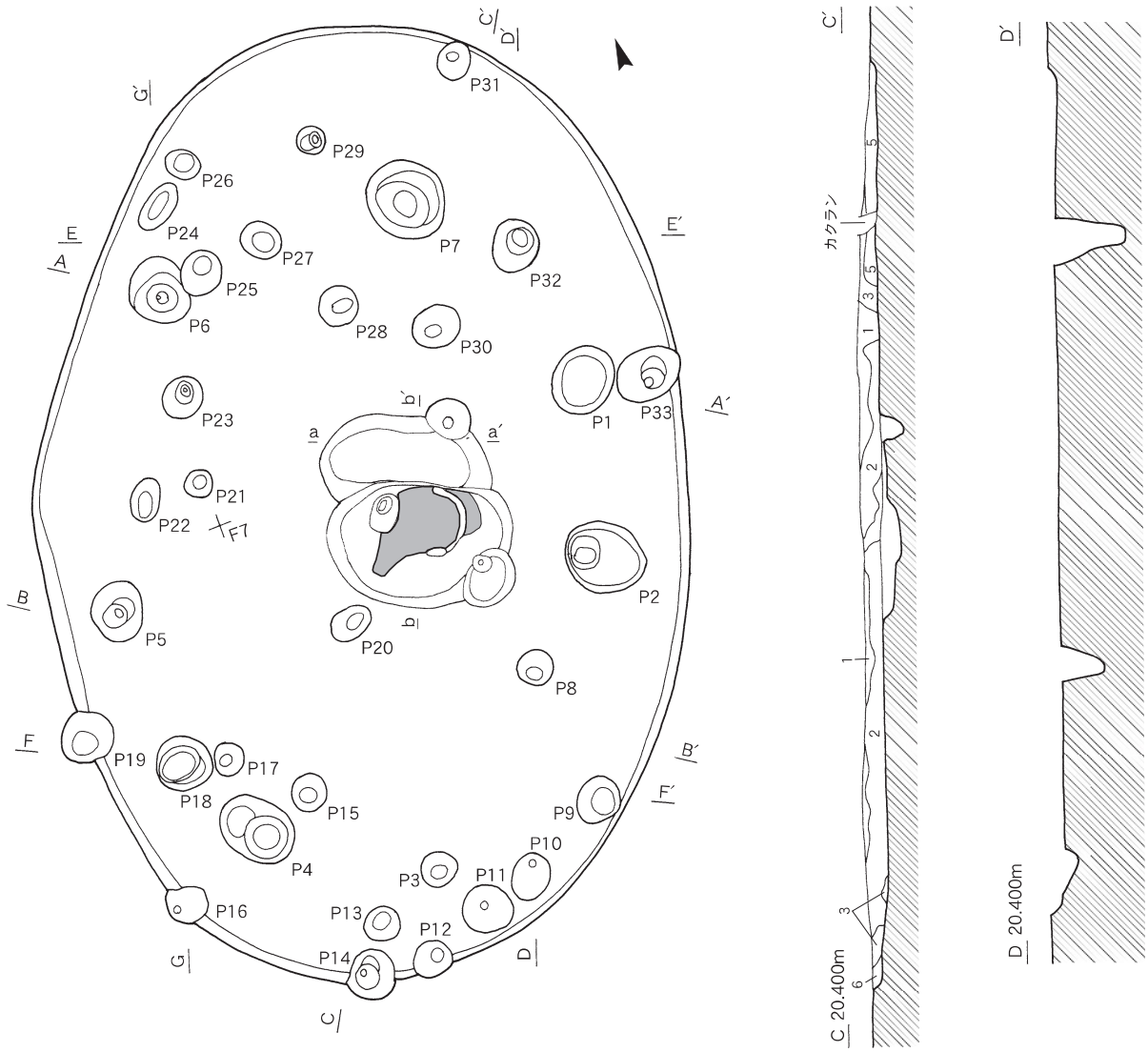
炉跡は地床炉で、中央やや南東寄りから２基が切り合って検出され、南側の２号炉が北側の１号炉を切っている。プランはともに楕円形を呈する。１号炉は長径140cm、短径は調査範囲で50cm、深さ４cmの規模で、

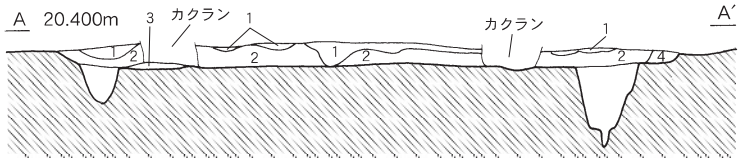
第３表　１号住居跡柱穴計測表　（単位cm）

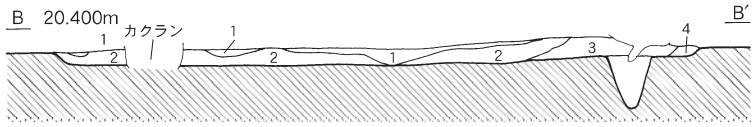
	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	51.6	7.5	P7	68.0	81.7	P13	30.0	58.6	P19	45.0	68.5	P25	38.0	18.3	P31	31.0	81.8
P2	68.0	31.8	P8	29.0	36.6	P14	48.0	58.2	P20	37.0	63.5	P26	28.0	13.3	P32	41.0	59.0
P3	31.0	69.9	P9	38.0	72.6	P15	28.6	10.3	P21	24.0	38.8	P27	33.0	33.8	P33	55.0	69.1
P4	68.0	55.3	P10	40.0	13.5	P16	35.0	49.9	P22	36.0	18.3	P28	32.0	30.0			
P5	52.0	82.0	P11	42.0	17.7	P17	25.0	58.5	P23	36.0	43.5	P29	24.0	24.4			
P6	57.0	71.8	P12	32.0	68.3	P18	47.0	57.8	P24	45.0	16.5	P30	40.0	24.0			

第14図　第１次調査区全体図

壁面は緩やかに立ち上がる。また、２号炉は長径155cm、短径105cm、深さ９cmの規模で、壁面は同様に緩やかである。主軸は１号炉がＮ－77°－Ｗ、２号炉はＮ－66°－Ｗを指向する。また、炉床面はよく焼けてお







第１層　**黒茶褐色土**　炭化物粒子多く含む
第２層　**暗茶褐色土**　ローム粒子・炭化物粒子多く含む
第３層　**暗茶褐色土**　ローム粒子若干含む
第４層　**黄 褐 色 土**　ロームの再堆積層　炭化物若干含む
第５層　**茶 褐 色 土**　ローム粒子多く含む
第６層　**暗黄褐色土**　ロームブロックを混入する

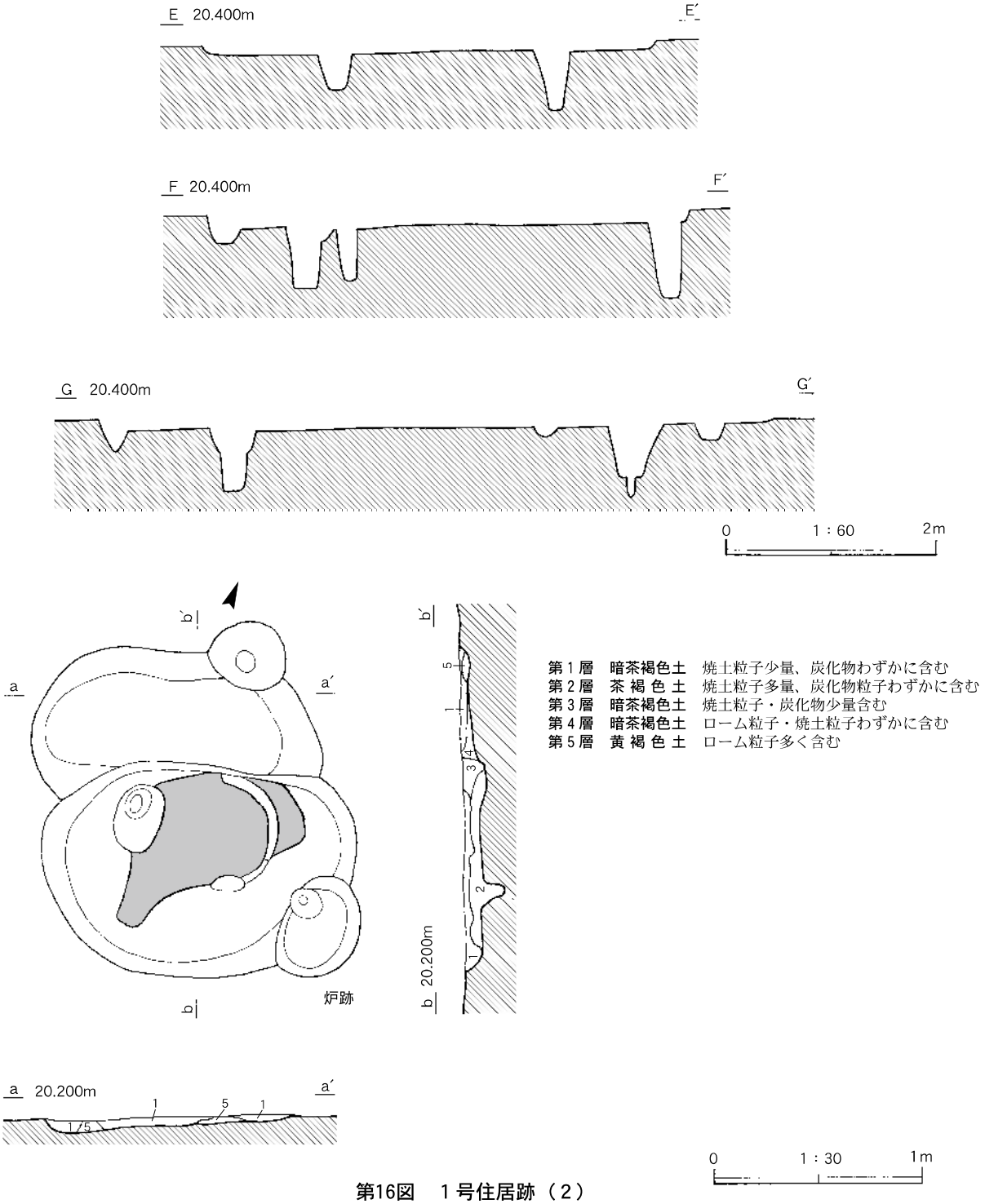
0　1：60　2m

第15図　１号住居跡（１）

り、焼土塊が堆積する。覆土は焼土粒、炭化物粒を多く含む明茶褐色土が主体である。

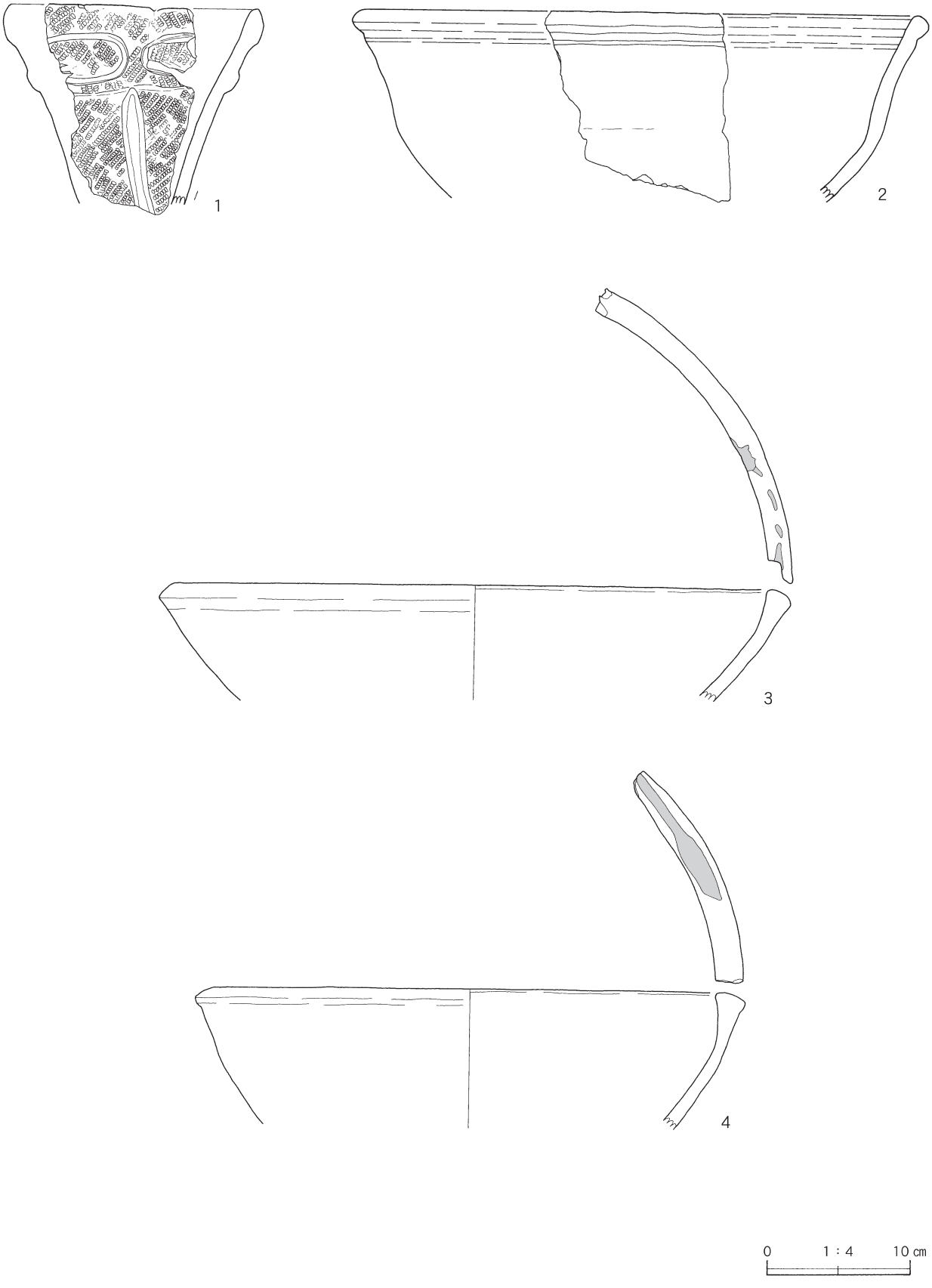
住居跡に伴うピットは床面から33基が検出された。このうち主柱穴と想定されるものはP1～ P7の７基で、南側のP1・P2付近が入口部と考えられる。それぞれの深さはP1－7.5㎝、P2－31.8㎝、P3－69.9㎝、P4－55.3㎝、P5－82.0㎝、P6－71.8㎝、P7－81.7㎝である。

出土遺物は住居跡全体に分布するが、比較的、炉跡付近に集中する傾向がみられた。器種では浅鉢形土器の出土が目立つ。時期は加曽利ＥⅢ式期が主体である。



第16図　１号住居跡（２）

第17図　１号住居跡遺物出土状況



第18図　１号住居跡出土遺物（１）

第19図　１号住居跡出土遺物（２）

１号住居跡出土土器（第18・19図）

１は深鉢形土器である。胴部はわずかに外反しながら立ち上がり、口縁部は肥厚し、口唇端部の断面は先鋭する。RL の単節縄文が隆帯を含めた器面全体に地文として施される。口縁部文様帯は楕円形区画文が横位に展開する。区画文内は地文が施文されたあと、隆帯裾部を棒状工具により沈線状に磨り消す。また胴部文様帯は横位の隆帯によって口縁部と区画されるが、同様に隆帯裾部を磨り消している。さらに逆Ｕ字状の懸垂文内部も縄文が磨り消される。残存高は13.7㎝で、復元口径は20.2㎝である。

２～４は浅鉢形土器である。いずれも表面は滑沢する。２は胴部中央付近で内側に屈曲し、口縁部でわずかに外反する器形である。口唇直下には浅い沈線が廻らされる。３、４は同一個体と想定され、底部から胴部には内湾しながら立ち上がり、口縁部で矩形に肥厚し、内面に稜を有する。口唇端部は平滑で、漆塗膜の痕跡がみられる。いずれも大型で、復元口径は２が39.8㎝、３、４は38.3㎝である。

５は円筒形を呈する深鉢形土器で、勝坂Ⅲ式土器である。口唇部に１条の沈線が廻り、口縁部は縦位の集合沈線を施す。６は隆帯による楕円形区画文の裾部と口唇部に平行する有節沈線文を施す。阿玉台Ⅱ式の深鉢形土器である。

７～10は深鉢形土器の口縁部片である。７、８はやや内湾し、９、10は直線的に立ち上がる。11は頸部無文帯で口縁部文様帯とは２条の隆帯で区切られる。12～14は深鉢形土器の胴部片である。いずれも地文に LR の単節縄文を施した後、沈線により懸垂文が描かれて内部は磨り消される。

15は沈線による懸垂文の一部である。16は口縁部と胴部を区画する平行沈線から小渦巻文の懸垂文が描かれる。

17～21は連弧文土器の口縁部を一括した。17～20は口唇部下に交互刺突文を施す。21は幅の広い無文帯下の平行する微隆帯間に円形刺突文を廻らす。

22は深鉢形土器の底部片である。平行沈線による懸垂文が描かれる。

23～25は浅鉢形土器の口縁部片である。23は口唇部が内側に張り出し、２条の沈線が施される。24は直線的に立ち上がり、口縁部で内湾して端部が肥厚する。25は口唇部と口縁部に赤漆による彩色が施されている。

26は底部片で、器面には沈線による蕨手状のモチーフが不規則に描かれている。

27は注口土器の胴部片で、堀之内Ⅱ式の土器である。磨消縄文帯により渦巻文を描いている。

３号住居跡（第20・21図、第４表）

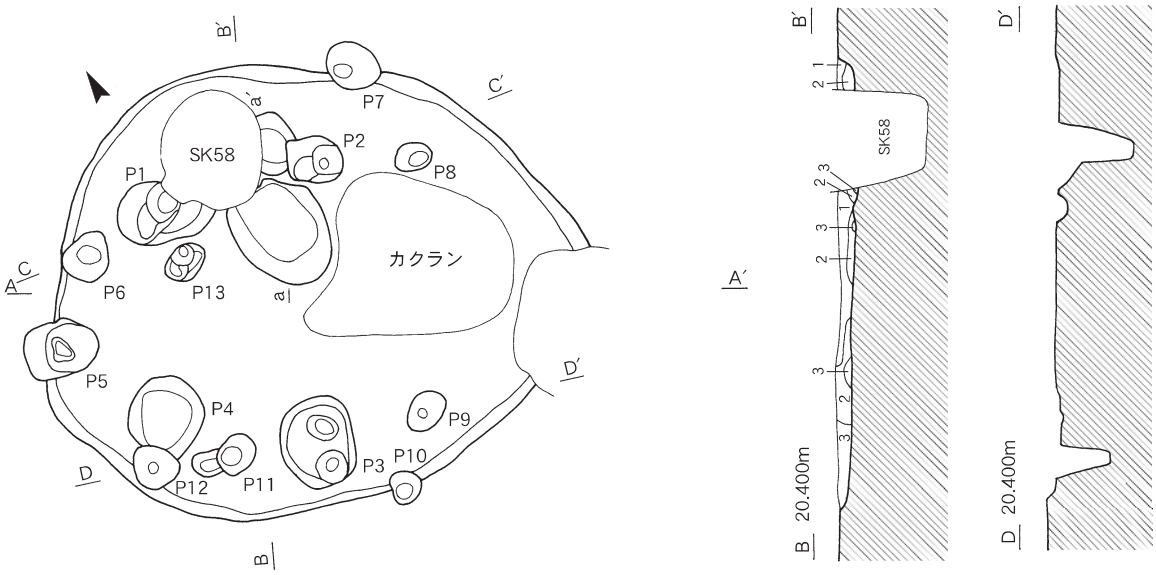
住居跡は D7 グリッド付近に位置する。南東隅と床面の一部を攪乱によって壊されている。復元長径は4.0m、短径は3.6mで、プランは東西に緩い楕円形を呈する。主軸はＮ－５°－Ｗを指向する。壁面は緩やかに立ち上がるが、総じて10㎝程度と低い。床面はほぼ平坦で硬く締まっており、壁溝は検出していない。

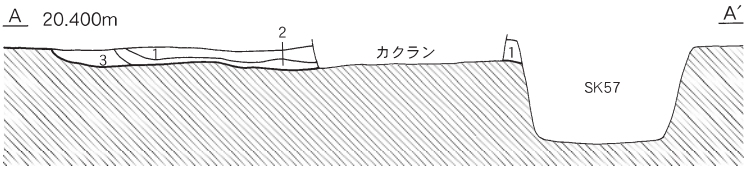
覆土は自然堆積と考えられ、ローム粒子、炭化物粒子を含む暗茶褐色土を主体に堆積している。遺物の出土状況は炉跡周辺及び P5 付近に偏在していた。

炉跡は地床炉で、２基が住居跡の中央やや北寄りに切り合い状態で確認された。時期差があり、２号炉

第４表　３号住居跡柱穴計測表　（単位㎝）

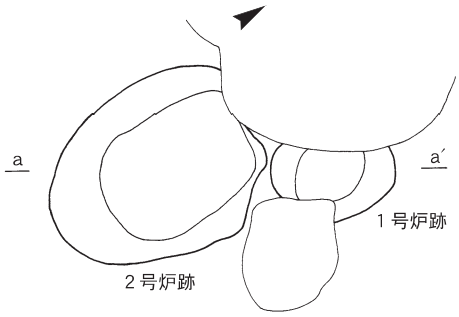
	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	78.0	56.9	P4	58.0	27.9	P7	43.0	21.5	P10	26.0	25.0	P13	37.0	23.2
P2	45.0	57.4	P5	59.0	74.4	P8	30.0	47.9	P11	52.0	56.9			
P3	72.0	43.9	P6	40.0	60.7	P9	36.0	37.2	P12	37.0	69.2			

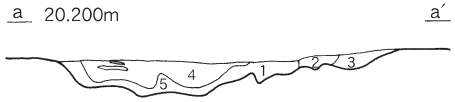




0　1：60　2m

第１層　暗茶褐色土　ローム粒子・炭化物粒子若干含む
第２層　黄 褐 色 土　炭化物粒子若干、ローム粒子多く含む
第３層　黄 褐 色 土　ローム粒子多く含む

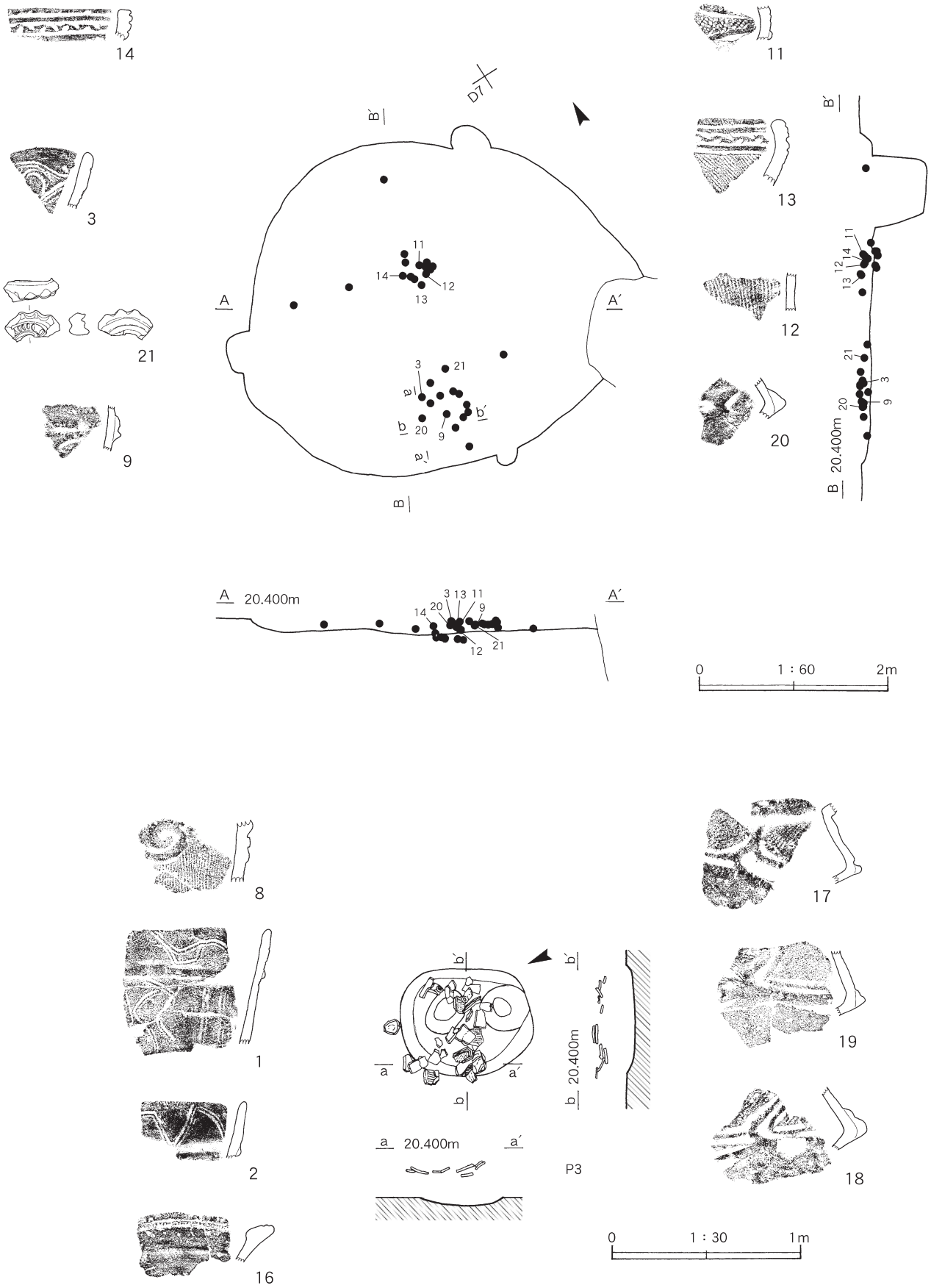




第１層　暗 褐 色 土　焼土粒子若干含む、炭化物粒子多く含む
第２層　褐　色　土　焼土ブロック（φ10㎜）多く含む
第３層　明 褐 色 土　焼土粒子（φ３㎜）多く含む
第４層　黒 褐 色 土　焼土粒子・炭化物粒子若干含む
第５層　暗黄褐色土　ロームの再堆積層、焼土若干含む

0　1：30　2m

第20図　３号住居跡



第21図　３号住居跡遺物出土状況

第22図　３号住居跡出土遺物

が１号炉跡を切っている。それぞれ長楕円形を呈し、１号炉跡は長径50㎝、短径35㎝、深さ６㎝で、主軸はＮ－１°－Ｗを指向する。覆土は焼土粒子、炭化物粒子を多く含む明褐色土を主体とする。２号炉跡は長径85㎝、短径70㎝、深さ12㎝を測る。主軸はＮ－３°－Ｗを指向し、覆土は焼土ブロックを多く含む褐色土を主体とする。

住居跡に伴うと想定されるピットは13基が検出された。このうち主柱穴と想定されるものはP1～P5で、入口部はP3付近と考えられる。それぞれの深さはP1－56.9㎝、P2－57.4㎝、P3－43.9㎝、P4－27.9㎝、P5－74.4㎝である。

覆土中からは加曾利ＥⅡ式の土器が主体的に出土しており、住居跡の帰属はこの時期に比定される。

３号住居跡出土土器（第22図）

１、２、５、６は同一個体であると考えられ、立ち上がりが直線的に開く器形で深鉢形土器である。口縁部には横位の隆帯が廻り、文様帯を区分している。地文はなく平行沈線により施文される。口縁部文様帯は連弧文が崩れ、不規則な波状文となっている。また、胴部は平行沈線による蛇行と直線の懸垂文が交互に描かれる。

３は波状口縁を呈する深鉢形土器である。文様は平行沈線により描かれ、蛇行する横位の沈線間に渦巻状の文様を挟んで剣先状とする。４は口縁部で端部がやや内湾する。口唇部より垂下する沈線文と横位の沈線文が描かれる。７は器面に横位の隆帯が貼付される。

８は深鉢形土器で、細かい撚糸文の地文上に隆帯による渦巻文が貼付される。９～11は深鉢形土器の口縁部付近の破片である。９、10は隆帯による楕円形区画文、11は三角形の区画文が描かれる。12は撚糸文の地文が縦位に施される。８の資料と同一個体かもしれない。

13、14は連弧文土器の口縁部片で、横位の交互刺突文が施される。15は胴部片でLRの単節縄文の地文上に３条の平行沈線で連弧文が描かれる。

16は口縁部が大きく外反する浅鉢形土器である。口縁部は肥厚し、内部に稜を作り出す。また、口唇部には平行沈線間に刻みを充填し、横位の文様として描く。

17～20は浅鉢形土器の胴部片を一括した。このうち17～19は同一個体で、口縁部は外屈して無文である。胴部は平行する２条の隆帯で区画文を描く。20は同様のモチーフであるが小型である。

21は鋸歯状のモチーフを有する橋状把手の一部で、鶏頭冠に類似する。

４号住居跡（第23～25図、第５表）

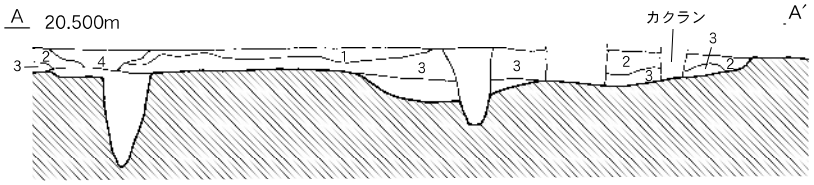
住居跡はC5グリッド付近に位置し、６号住居跡と重複関係にあり、４号住居跡が新しい。プランは不整楕円形を呈し、長径6.6m、短径5.1m、深さ0.15mの規模である。主軸はＮ－21°－Ｅを指向する。壁の立ち上がりは緩やかである。床面はほぼ平坦で、硬く締まっていた。壁溝は検出しなかった。

覆土は自然堆積であり、ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を含む茶褐色土を主体とする。遺物は炉跡付近に集中する傾向を示す。

炉跡は住居跡の中央やや南西寄りに２基を確認した。１号炉跡は地床炉で長径90㎝、短径70㎝、深さ12㎝を測り、平面形は楕円形で壁面は緩やかに立ち上がる。主軸はＮ－35°－Ｗを指向する。２号炉跡は大型で、平面形は不整円形を呈する。炉床面はよく焼けている。炉跡の南端に３つの自然礫を配した石組が検出されており、石囲炉に分類すべきか躊躇する。炉跡の規模は長径160㎝、短径135㎝、深さ12㎝を測り、主軸はＮ－21°－Ｗを指向する。

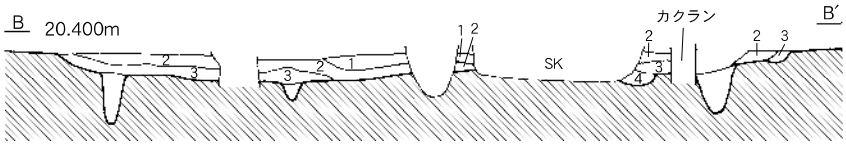
４号住居跡

第１層　暗茶褐色土　ローム粒子・炭化物粒子若干含む、焼土粒子若干含む
第２層　茶 褐 色 土　ロームを斑状に含む、焼土・炭化物粒子若干含む
第３層　明茶褐色土　ロームを斑状に多く含む
第４層　黒茶褐色土　植痕多い、ローム粒子若干含む
第５層　明 褐 色 土　ローム粒子若干含む
第６層　暗 褐 色 土　ローム粒子多く、焼土粒子若干含む



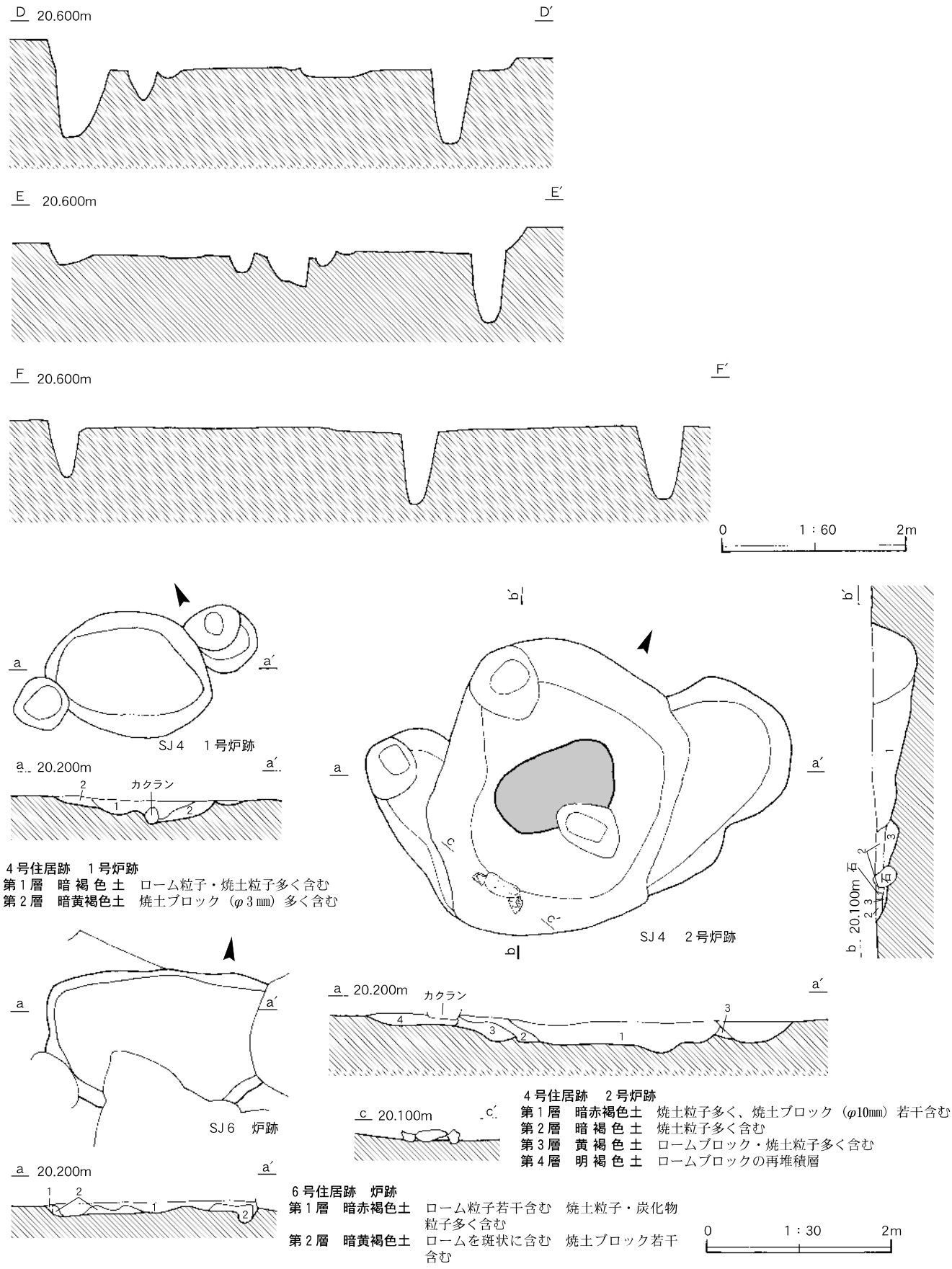
６号住居跡

第１層　暗黄褐色土　ローム粒子多く含む
第２層　黄 褐 色 土　ローム粒子多く含む
第３層　暗黄褐色土　ローム粒子・ロームブロック多く含む
第４層　黄 褐 色 土　ローム粒子・ロームブロック多く含む



0　1：60　2m

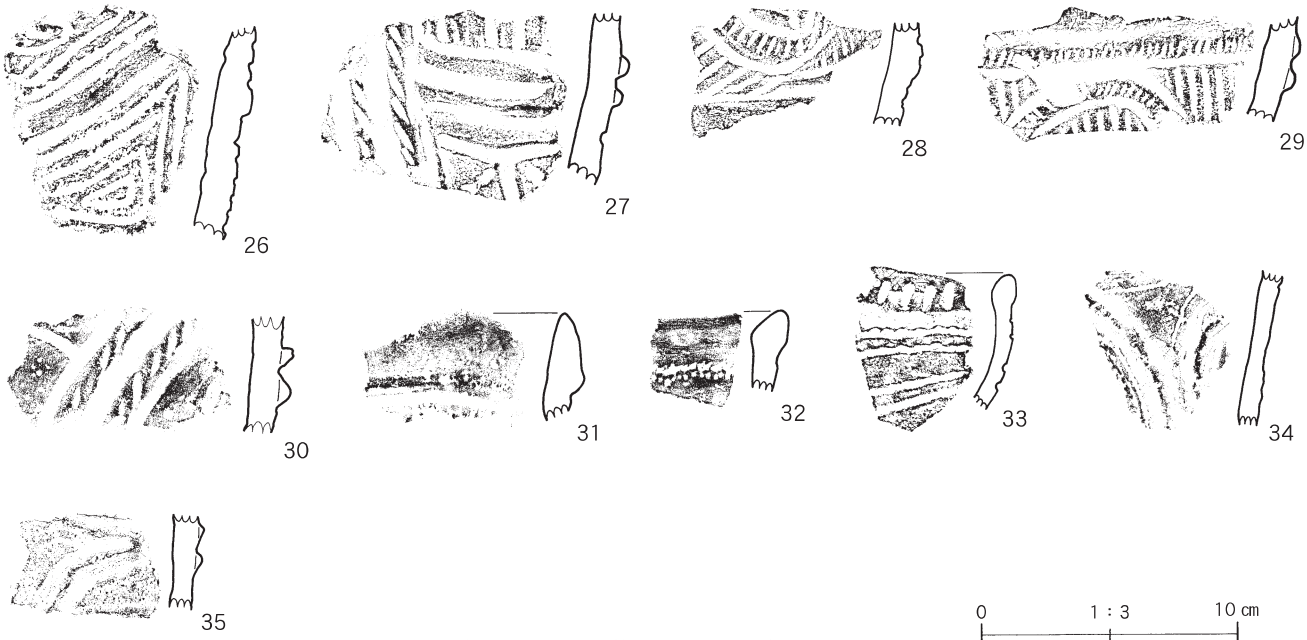
第23図　４・６号住居跡（１）



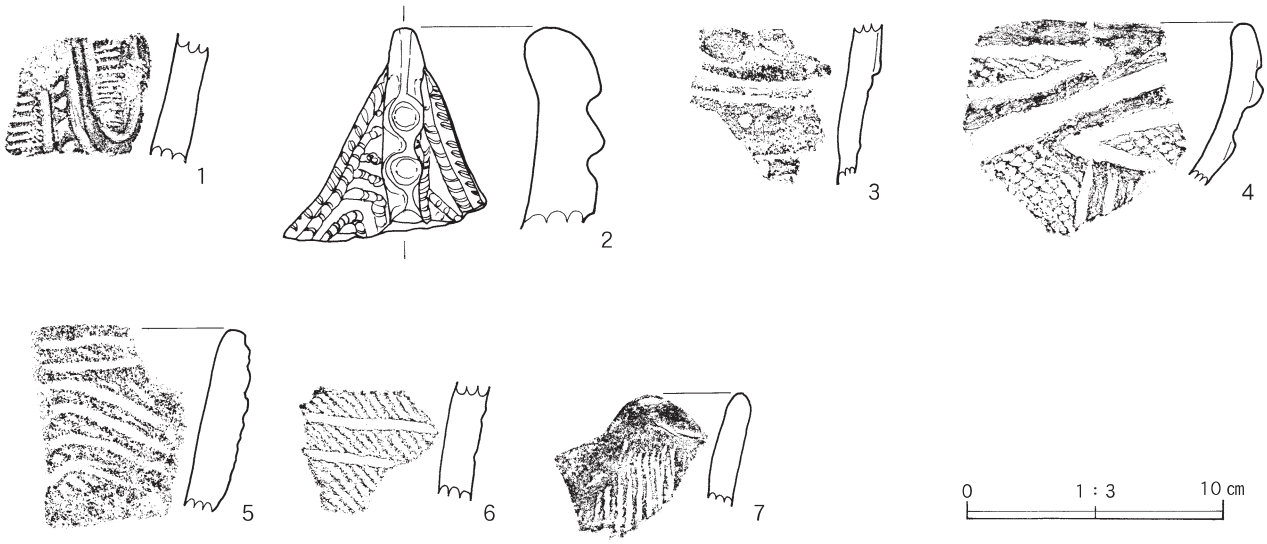
第24図　４・６号住居跡（２）

第25図　４・６号住居跡遺物出土状況

第26図　４号住居跡出土遺物（１）



第27図　４号住居跡出土遺物（２）



第28図　６号住居跡出土遺物

第５表　４・６号住居跡柱穴計測表

SJ4　　（単位cm）

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	126.0	83.6	P6	80.0	66.5	P11	34.0	49.1	P16	46.0	36.6	P21	66.0	24.5	P26	40.0	77.4
P2	51.0	79.5	P7	61.0	74.8	P12	30.0	33.3	P17	44.0	53.7	P22	53.0	60.3			
P3	47.0	76.3	P8	58.0	69.2	P13	26.0	69.6	P18	37.0	14.0	P23	31.0	12.5			
P4	42.0	62.9	P9	29.0	67.1	P14	37.0	63.2	P19	41.0	62.5	P24	32.0	57.8			
P5	36.0	60.5	P10	31.0	33.5	P15	35.0	17.0	P20	44.0	72.6	P25	42.0	73.8			

SJ6　　（単位cm）

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	60.0	78.0	P5	37.0	73.2	P9	72.0	54.6	P13	41.0	29.0	P17	29.0	59.5	P21	37.0	64.1
P2	36.0	24.3	P6	26.0	23.1	P10	32.0	14.1	P14	35.0	25.6	P18	44.0	22.1			
P3	80.0	68.3	P7	24.0	―	P11	40.0	89.7	P15	34.0	74.4	P19	30.0	13.6			
P4	70.0	66.4	P8	62.0	66.2	P12	32.0	22.6	P16	31.0	39.9	P20	29.0				

ピットは床面から48基を検出したが、このうち主柱穴と想定されるものはP1～ P6で、入口部はP3とP4付近であると考えられる。それぞれの深さはP1－83.6㎝、P2－79.5㎝、P3－76.3㎝、P4－62.9㎝、P5－60.5㎝、P6－66.5㎝である。

覆土中から加曾利ＥⅡ式期の遺物が主体的に出土しており、住居跡はこの時期に比定される。

４号住居跡出土土器（第26・27図）

１～９は深鉢形土器の口縁部片である。１は加曾利ＥⅠ式期の土器で、撚糸文を地文として２本の隆帯で横Ｓ字状文が貼付されている。平口縁であるが口唇端には隆帯が一部突出し突起となる。２は楕円形区画文が隆帯と深い沈線によって描かれる。３は隆帯のみで渦巻文が描かれる。４の区画文内は無文である。５は区画文から隆帯が派生して渦巻文を描く。６、７は楕円形区画文が描かれる。８は緩い波状口縁を呈する。楕円形区画文の内部は細かい撚糸文である。９は区画文内部に集合沈線が施される。

10～12は深鉢形土器の口縁部片である。10は隆帯間の区画文に撚糸文が施されているが、上からナゾられ、一部が磨り消されている。11は区画文を描く隆帯が上方から二股に分かれ、渦巻文を充填している。12は隆帯裾部がナゾられ、沈線状である。

13～16は深鉢形土器の胴部片である。13、14は平行沈線による懸垂文で内部は磨り消される。15は弧状の沈線、16は地文の磨り消しが認められる。

17は無文の口縁部を有する深鉢形土器である。口縁は外反しながら立ち上がり、端部でわずかに内湾する。頸部で括れ胴部上半が膨らむ器形と想定される。頸部には２本の沈線が施され、ここから斜状に懸垂文が施文される。18、19は口縁部の平行沈線間に交互刺突文を施す。18は括れ部の地文を幅広く磨り消す。19は波状口縁を呈し、内側が突出して稜を作り出す。17～19は曽利系の土器である。

20は深鉢形土器の波頂部で、条線を地文としている。加曾利ＥⅣ式に比定される。

21～23は深鉢形土器の底部を一括した。21は平行沈線による懸垂文である。23は地文に撚糸文を施し、平行する隆帯で弧状の文様を貼付する。

24は無文の浅鉢形土器で口縁部が大きく内湾する。

25は深鉢形土器の口縁部に付した橋状把手である。鋸歯状のモチーフが鶏頭冠に酷似する。

26～30は勝坂Ⅲ式の土器で、いずれも深鉢形土器の胴部片である。隆帯によって区画された器面を集合沈線で充填する。26以外は隆帯上に刻みを有する。27は横位の楕円形隆帯と三叉文が施される。

31～34は阿玉台Ⅱ式の土器である。31、32は波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部片である。31は肥厚した口縁部に沿って角押文が廻る。32は同様に２列の刺突文である。33は肥厚する口唇部に列点が刻まれ、胴部には弧状に平行する角押文が施される。34は断面三角形の隆帯が貼付される。34は隆帯に沿うように有節沈線文が描かれる。

35は胴部片で剣先状に蛇行する隆帯が描かれる。阿玉台Ⅰｂ式に比定される。

５号住居跡（第29・30図、第６表）

住居跡はD4・E4グリッド付近に位置する。北側の壁と床面の一部を攪乱により壊される。平面形はほぼ円形を呈し、長径4.6m、短径4.4m、深さ0.2mの規模である。主軸はほぼ磁北を指向する。住居跡は台地の肩部に立地するため、南西部の壁がやや深い。壁の立ち上がりは全体として急であるが、東側の一部は緩やかである。床面はほぼ平坦で、硬く締まっている。また、壁溝は検出しなかった。

覆土はローム粒子、炭化物粒子を含む茶褐色土を主体とする。また、床面に近い場所では細かい焼土ブ

ロックの混入が認められた。遺物は覆土中から土器片が検出されたが少量であった。

炉跡は２基確認されており、どちらも地床炉である。１号炉跡は住居跡の北側に位置し、長径140㎝、短径90㎝、深さ８㎝を測り、平面形は楕円形を呈する。炉床面はよく焼けている。主軸はＮ－29°－Ｅを指向する。２号炉跡は東側の壁際で検出された。長径105㎝、短径80㎝、深さ12㎝で、平面形は不整円形を呈し、主軸はＮ－64°－Ｗを指向する。いずれも覆土中に焼土ブロックを多く含んでいる。

床面ではピットが14基検出されており、このうち壁際から検出されたP1～P7が主柱穴と想定され、南側のP3とP6付近が入口と想定される。それぞれのピットの深さはP1－72.6㎝、P2－81.5㎝、P3－74.6㎝、P4－60.3㎝、P5－68.3㎝、P6－72.0㎝である。

覆土中からは加曽利ＥⅡ式期の遺物が主体的に出土しており、住居跡の帰属も同時期に比定される。

第６表　５号住居跡柱穴計測表　（単位㎝）

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	64.0	72.6	P4	30.0	60.3	P7	28.0	56.8	P10	26.0	35.0	P13	33.0	75.2
P2	36.0	81.5	P5	43.0	68.3	P8	48.0	67.7	P11	32.0	37.7	P14	31.0	13.1
P3	46.0	74.6	P6	38.0	72.0	P9	40.0	59.7	P12	24.0	40.2	P15	36.0	42.7

５号住居跡出土土器（第31図）

１は住居跡の覆土中から破片の状態で検出された深鉢形土器である。胴部上半から口縁部の一部までが遺存していた。胴部はやや内湾しながら立ち上がり、頸部で外反して口縁部は直立状となる。口縁部文様帯は区画文を有し、渦巻き文が配されるようである。地文はLRの単節縄文が施される。頸部は広い無文帯となり、胴部とは平行隆帯で区画される。胴部には隆帯による懸垂文と蛇行隆帯が交互に３単位施される。地文は同様にLRの単節縄文である。復元口径は42.5㎝、現存高は24.0㎝である。胎土に片岩の細片が混入する。色調は内外面ともに暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

２は口唇部に文様がない深鉢形土器で、早期の夏島式に比定される。口唇端でわずかに外反し、胴部の文様はRLの単節縄文が施される。

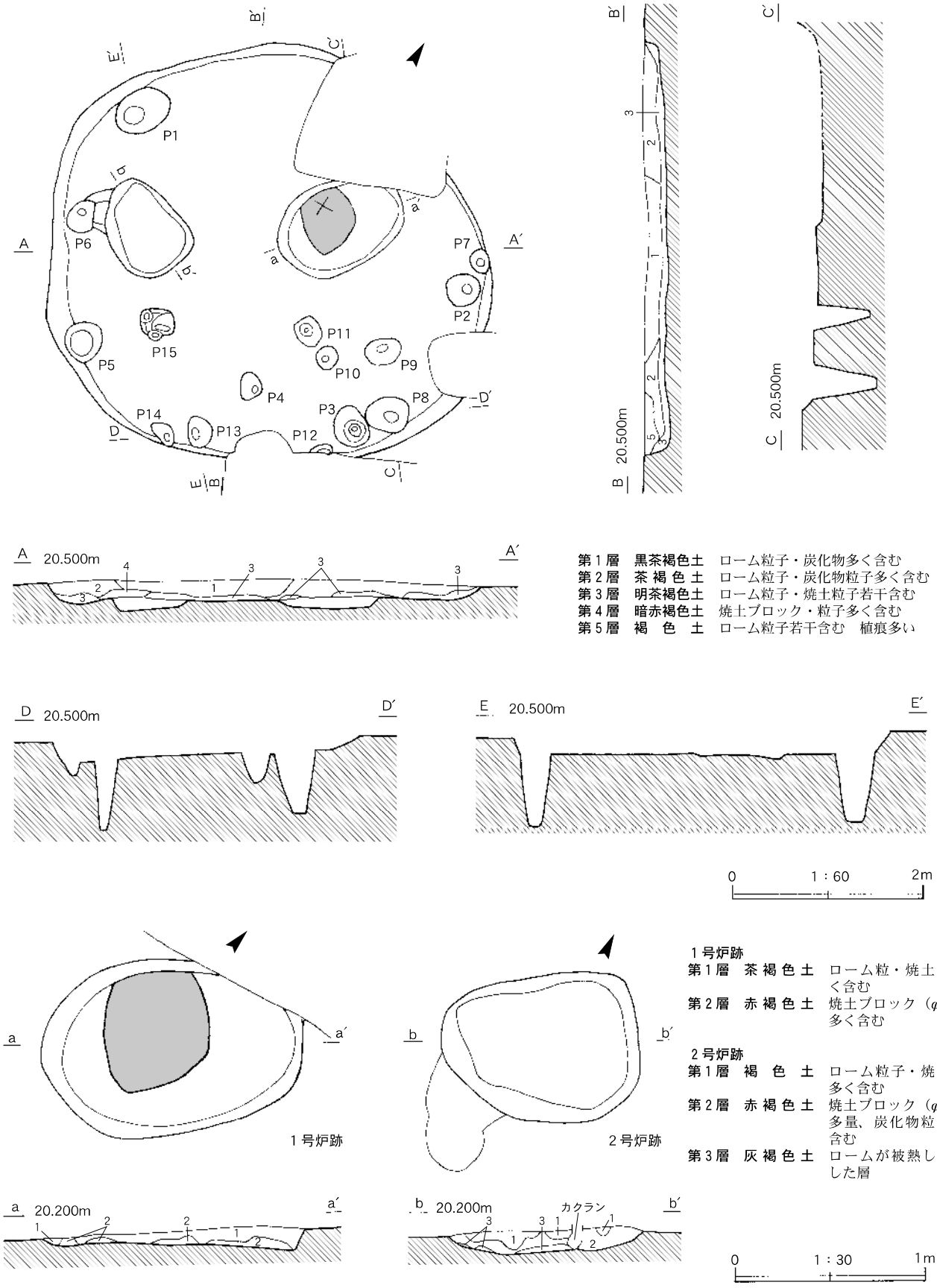
３は口縁部が無文で、頸部の括れ部に沈線を廻らす。口唇部には２条の浅い沈線が平行して施される。４は刻みを有する隆帯により文様を区画する深鉢形土器の胴部片である。５、６は爪形文による文様が描かれる。５は三叉文が施され、６は粗い角押文が充填される。７は爪形文と半裁竹管の刺突による蓮華文が描かれる。これらは勝坂Ⅲ式である。

８～10は深鉢形土器の口縁部片である。いずれも外反する器形である。８は隆帯による楕円形区画文から渦巻文が派生する。９は口唇部がわずかに内面へ突出する。外面の文様帯は浅い沈線により区画され、内部は条線で充填される。10は口唇部に小さな突起を有する。口縁部文様帯の地文は撚糸文である。

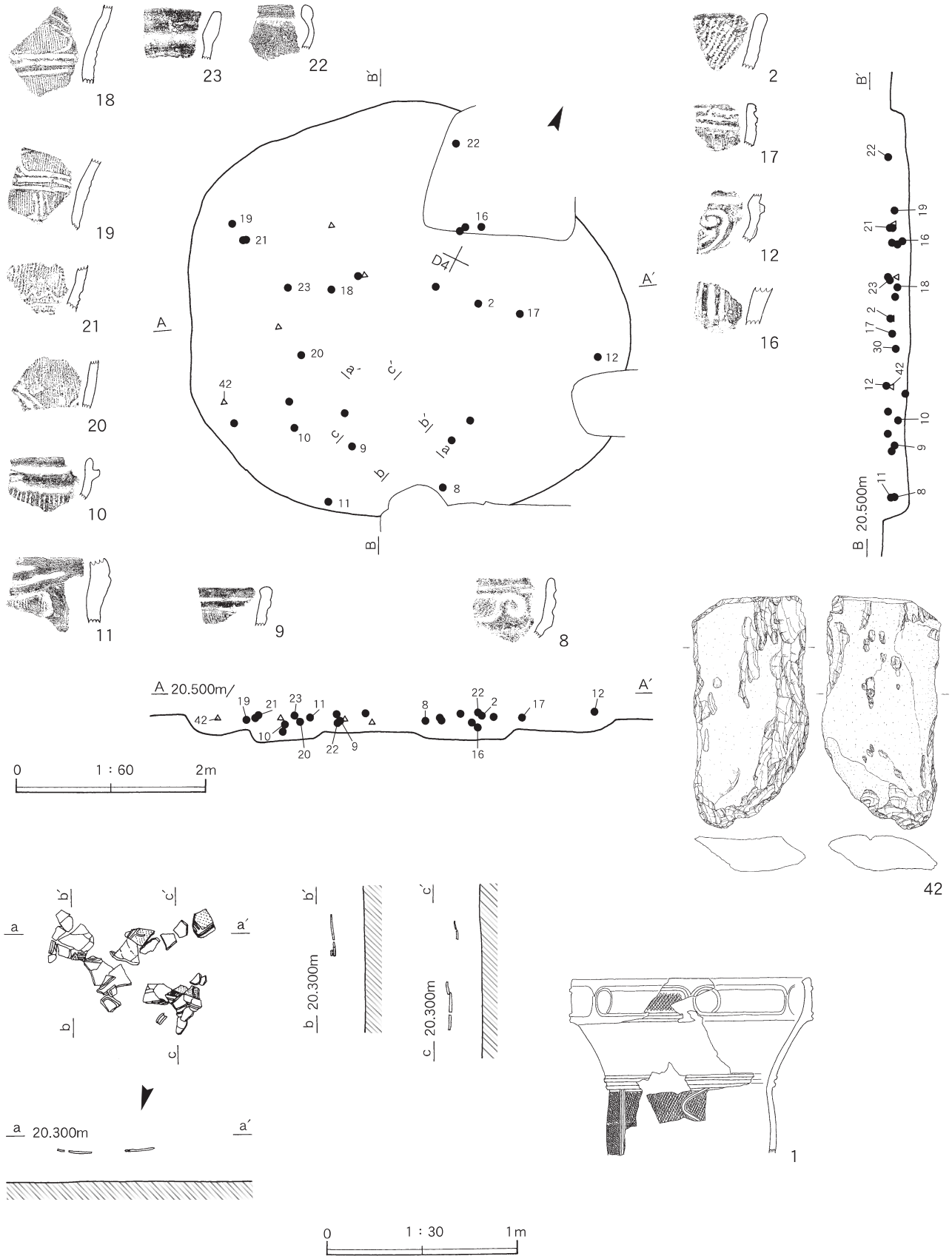
11～13は口唇部を欠く深鉢形土器の口縁部片である。11は緩い波状口縁で矩形の隆帯が三角形の区画文を描く。地文は細かい撚糸文である。12は隆帯により渦巻文を描く。13は区画文内に集合沈線を充填する。

14～16は深鉢形土器の胴部片である。14は地文の撚糸文上に蛇行隆帯と直線状の隆帯を懸垂文として貼付する。15は細かい撚糸文を地文として隆帯を貼付する。隆帯の裾部は沈線状に磨り消される。16は２条の平行する懸垂文である。

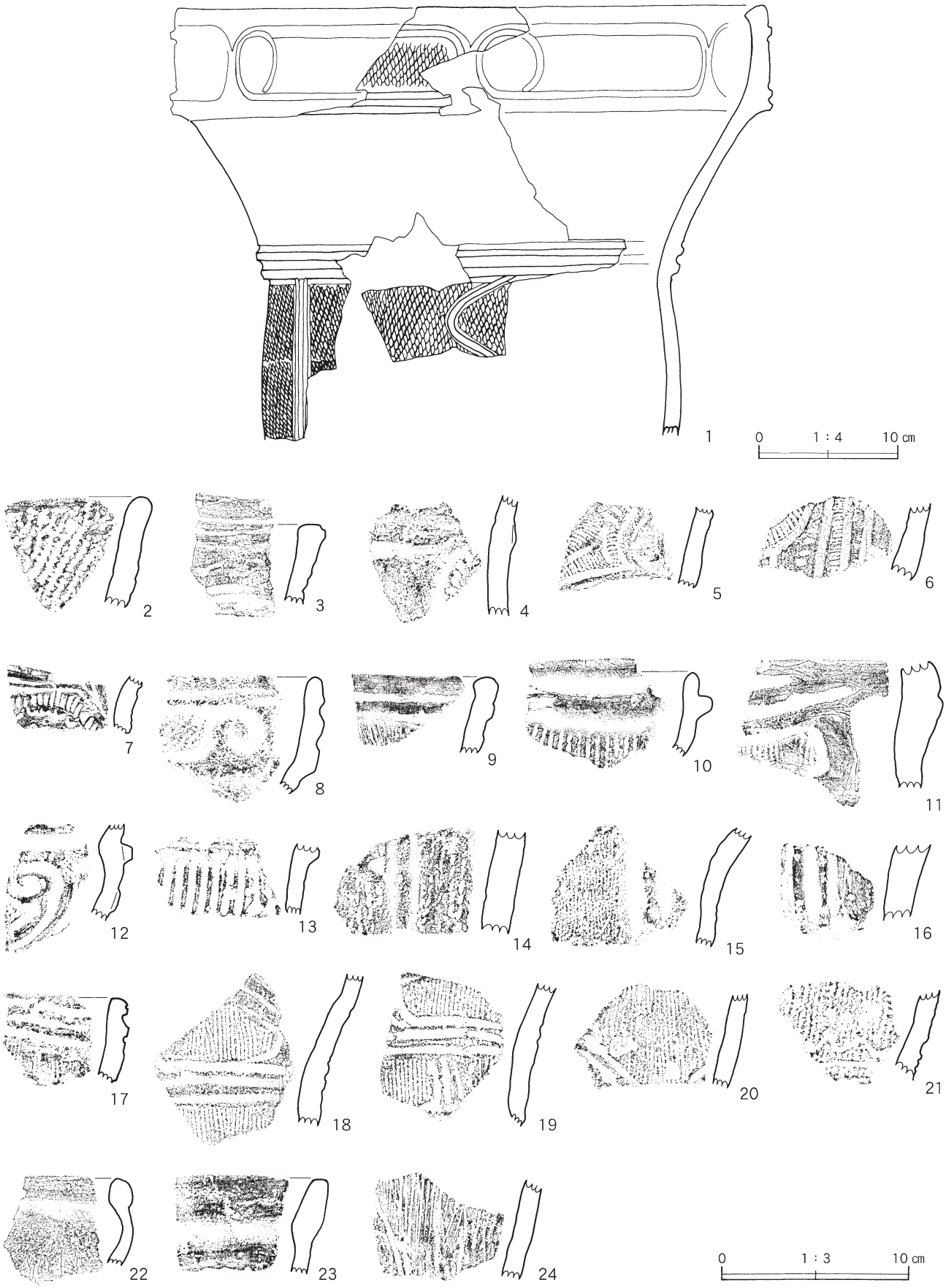
17～20は連弧文土器を一括した。17は口縁部片で口唇部直下の隆帯間に交互刺突文が廻る。18、19は同一個体であると思われる。ともに胴部の括れ部付近の破片で、３条の横位の平行沈線から連弧文あるいは懸垂


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
a
a′
b
b′
B 20.500m
C 20.500m
A 20.500m
D 20.500m
E 20.500m
第１層　黒茶褐色土　ローム粒子・炭化物多く含む
第２層　茶 褐 色 土　ローム粒子・炭化物粒子多く含む
第３層　明茶褐色土　ローム粒子・焼土粒子若干含む
第４層　暗赤褐色土　焼土ブロック・粒子多く含む
第５層　褐　色　土　ローム粒子若干含む　植痕多い
0　1：60　2m
１号炉跡
２号炉跡
a 20.200m
b 20.200m
カクラン
１号炉跡
第１層　茶 褐 色 土　ローム粒・焼土粒子多く含む
第２層　赤 褐 色 土　焼土ブロック（φ20㎜）多く含む
２号炉跡
第１層　褐　色　土　ローム粒子・焼土粒子多く含む
第２層　赤 褐 色 土　焼土ブロック（φ10㎜）多量、炭化物粒子多く含む
第３層　灰 褐 色 土　ロームが被熱し、硬化した層
0　1：30　1m

第29図　５号住居跡



第30図　５号住居跡遺物出土状況



第31図　５号住居跡出土遺物

文が派生する。地文は縦位の撚糸文である。20は平行する２条の沈線による連弧文である。

21は地文の撚糸文状に小波状の沈線文と単独の沈線が廻る。深鉢形土器の頸部付近の破片である。

22、23は無文の浅鉢形土器である。口縁部を肥厚させて、内外面ともに陵を作り出す。

24は条線の地文に逆Ｕ字状の磨り消し文を描く。加曾利ＥⅣ式の深鉢形土器である。

６号住居跡（第23～25図、第５表）

住居跡はC6グリッド付近に位置し、４号住居跡と重複関係にあり本住居跡が古い。また中・近世の土坑によって床面が大きく損なわれる。住居跡のプランは４号住居跡によって北部を大きく切られているが、概ね不整楕円形を呈すると考えられる。その規模は長径5.9m、短径は調査範囲で3.95m、深さ0.18mの規模である。主軸はＮ－69°－Ｗを指向する。壁の立ち上がりは緩やかである。床面はほぼ平坦で硬く締まる。壁溝の検出はなかった。

覆土はローム粒子、同ブロックを含む暗茶褐色土を主体とする。遺物の出土は少ないが、比較的壁際付近から出土する傾向にあった。

炉跡は住居跡のほぼ中央部で確認された。地床炉であり、プランは概ね楕円形を呈すると想定される。その規模は長径120㎝、短径72㎝、深さ６㎝を測る。炉床面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。主軸はＮ－82°－Ｅを指向する。

ピットは床面から20基検出されているが、このうち主柱穴はP1～P5と想定した。また、入口部はP3、P4付近になると考えられる。柱穴の深さはP1－78.0㎝、P2－24.3㎝、P3－68.3㎝、P4－66.4㎝、P5－37.0㎝である。

覆土中から出土した遺物は加曾利ＥⅡ式が主体であり、住居跡の帰属時期も当該期と考えられる。

６号住居跡出土土器（第28図）

１は低い隆帯と沈線によってＵ字状の区画文が描かれ、内部は横位の条線が充填される。勝坂Ⅲ式である。

２は山形の波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部片である。器形は内湾しながら立ち上がり、波頂部は肥厚して内側へ突出する。また外面では波頂部から押圧のある隆帯が垂下する。口唇部直下は刻みのある隆帯が縁取り、隆帯に沿って複数列の角押文が施されて区画文となる。区画内は同様に弧状の角押文が充填される。３は横位の隆帯に沿い、細かい角押文が胴部に平行して複数列が表現される。これらは阿玉台Ⅱ式である。

４は深鉢形土器の口縁部片で、立ち上がりは内湾する。文様帯は断面が矩形の隆帯によって三角形の区画文を描く。また、胴部文様帯は口縁部文様帯と接合し、２条の平行沈線による懸垂文が描かれる。

５、６は連弧文土器である。５は口縁部片で口唇直下には２条の平行沈線が廻り、その下部には４条の連弧文が描かれる。６は胴部の括れ部に廻る沈線文である。

７は口唇部に突起を有する深鉢形土器である。地文に撚糸文が施され、口唇部直下は帯状に磨り消されて無文帯となっている。

７号住居跡（第32・33図、第７表）

住居跡はC4グリッドに付近に位置する。西側の壁の一部を中世の地下式坑に壊される以外は、概ね全容が知られる。規模は長径4.2m、短径4.2m、深さ0.4mで、平面のプランは円形を呈する。主軸はＮ－13°－Ｗを指向する。壁面は緩やかに立ち上がる。床面はやや船底状に中央部がくぼみ、壁溝は東側で一部を検

出している。

覆土は上下２層に分かれ、ローム粒子、ロームブロック、焼土粒子を含む黄褐色土を主体に堆積する。遺物の出土状況は住居跡の中央部付近に集中する。

炉跡は住居跡の中央やや北寄りに位置する地床炉である。長径130㎝、短径80㎝、深さ16㎝を測り、プランは楕円形を呈する。床面は北側に一段高い平場を有し、壁の立ち上がりは緩やかである。主軸はＮ－３°－Ｅを指向する。

ピットは床面から13基を検出したが、主柱穴はP1～ P7、入口部は南側のP3とP5付近と想定される。それぞれのピットの深さはP1－66.5㎝、P2－76.1㎝、P3－66.6㎝、P4－12.5㎝、P5－63.1㎝、P6－83.1㎝、P7－65.9㎝である。

覆土中から出土した遺物は、加曾利ＥＩ式が主体であり、住居跡の帰属時期と想定される。

第７表　７号住居跡柱穴計測表　（単位㎝）

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	47.0	66.5	P4	42.0	12.5	P7	52.0	65.9	P10	48.0	67.9	P13	36.0	45.3
P2	45.0	76.1	P5	38.0	63.1	P8	66.0	39.5	P11	80.0	76.2			
P3	42.0	66.6	P6	59.0	83.1	P9	31.0	62.1	P12	38.0	69.0			

７号住居跡出土土器（第34～36図）

１はキャリパー形を呈する深鉢形土器で、胴部のみが復元できた。器形は長胴であるが、胴部下半に膨らみを有し、上部には括れ部からわずかに外反するように立ち上がる。厚手の土器であり、内面には荒い削り痕が認められる。輪積痕が明瞭に残され、その幅は約７㎝である。土器は輪積痕に沿って割れており、意図的な割断が想定できる。胎土には片岩の砕片が含まれる。残存高は25.1㎝、胴部の推定口径は30.5㎝である。地文は胴部には無節Ｌの撚糸文が全面に施される。撚糸の幅は約６㎜で、土器の下部から上部に向かって施文される。

２は深鉢形土器の口縁部に付く眼鏡状突起である。横位の貫通口を有し、刻みを施す隆帯で縁取る。

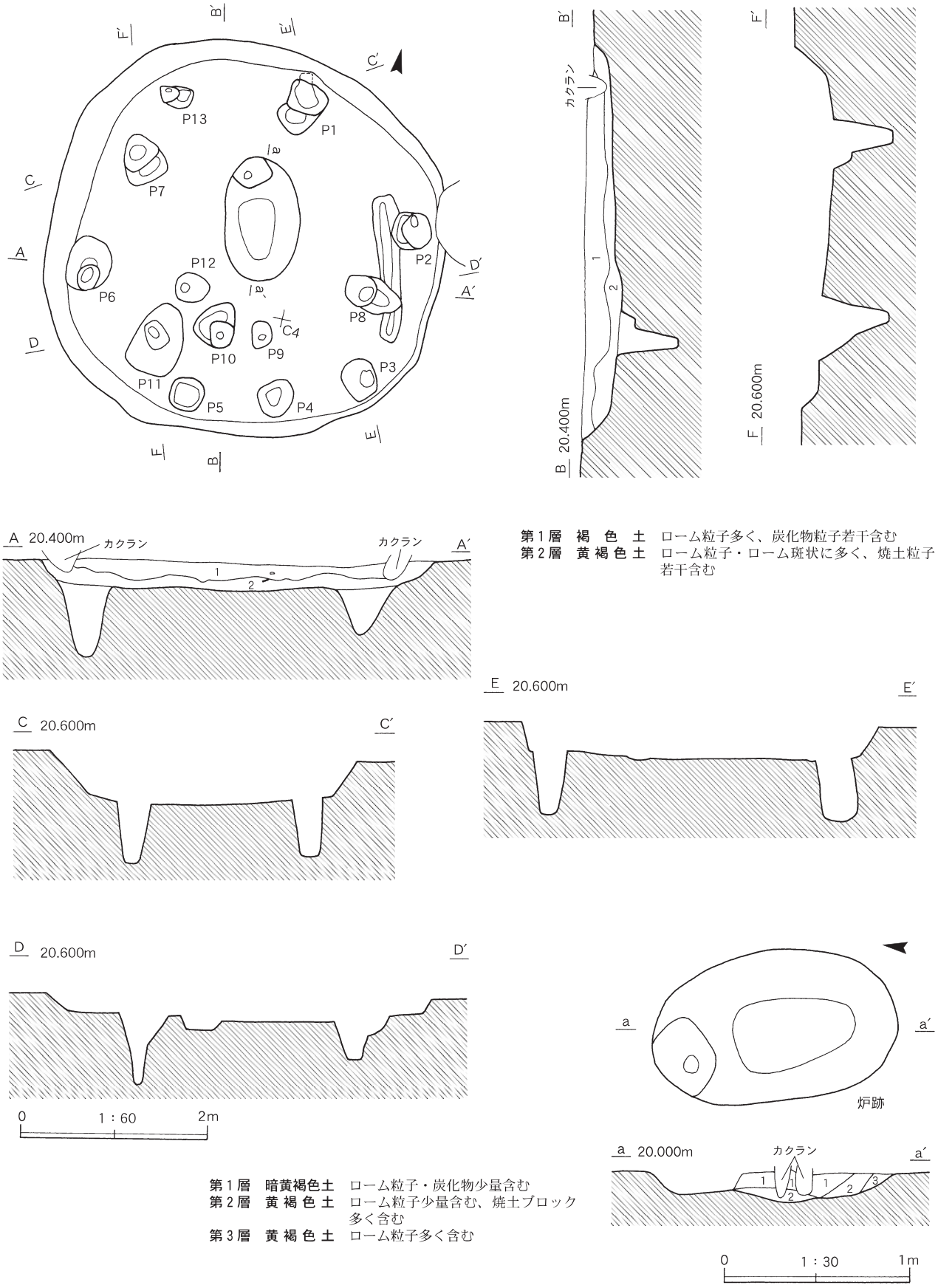
３は角押文により弧状のモチーフを描く。口唇部は刻みのある三角形の隆帯が施される。

４は隆帯により口唇部が肥厚する。また口縁部文様帯には角押文により小波状の沈線文と角押文が横位に廻る。胴部文様帯の地文はLRの単節縄文で、隆帯によって区画される。

５～９は爪形文による文様を描く深鉢形土器である。５は波状口縁で、口唇直下は外側へ庇状の隆帯が廻る。６は隆帯に沿って爪形文が施され、楕円形区画文を描く。７は口唇部から隆帯による渦巻文が垂下し、内部を爪形文で充填する。８は口縁部から派生する懸垂文による区画文で、内部は爪形文で充填され、三叉文を描く。９は区画文内に爪形文を充填し、集合沈線と三叉文を描く。10は爪形文による区画文で、内部は沈線による渦巻文が描かれる。

11～16は隆帯に刻みを有する。11、12は隆帯により楕円形区画文を描く。13は隆帯による楕円形区画文と平行沈線間に施された爪形文である。14は微隆帯が平行して文様を区画する。15は区画文内の集合沈線の一部が三角押文である。16は隆帯と沈線による弧状の入り組み文である。

17は沈線による渦巻文に短沈線を付す。18は楕円形区画文内に角押文と爪形文を充填する。19は交互に施された短沈線に沿って角押文が施される。20は地文の撚糸文上に、沈線を施した隆帯を横位に展開する。口唇上は連続する列点である。21は口縁部片である。楕円形の押圧が施される連鎖状の隆帯が弧状に展開する。



第１層　褐　色　土　ローム粒子多く、炭化物粒子若干含む
第２層　黄 褐 色 土　ローム粒子・ローム斑状に多く、焼土粒子若干含む

第１層　暗黄褐色土　ローム粒子・炭化物少量含む
第２層　黄 褐 色 土　ローム粒子少量含む、焼土ブロック多く含む
第３層　黄 褐 色 土　ローム粒子多く含む

第32図　７号住居跡

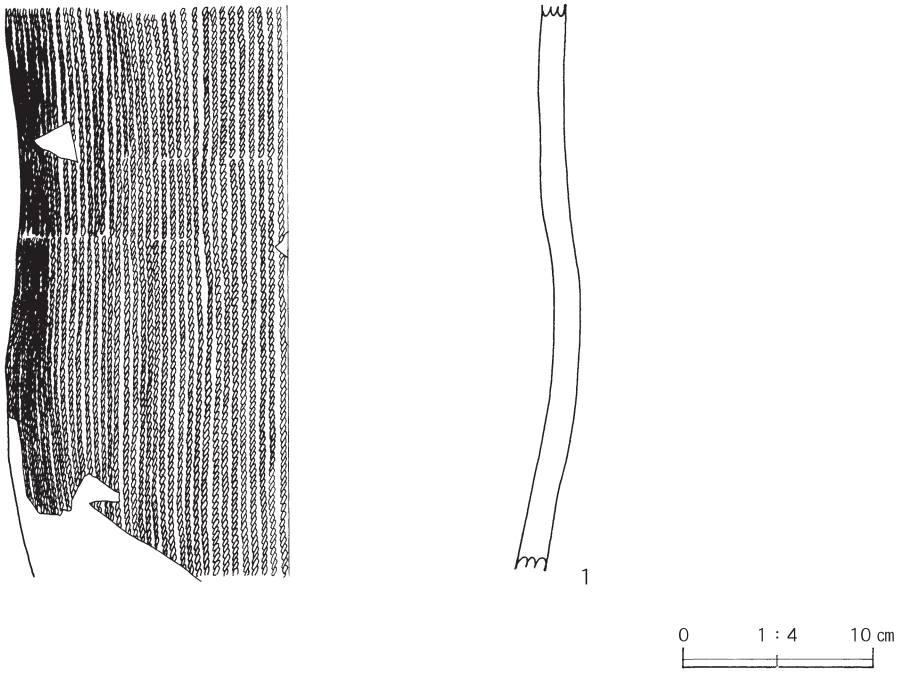
22は深鉢形土器の胴部片で、Ｙ字状の隆帯による懸垂文である。23、24は胴部に施される幅広の刻み目文である。これらは阿玉台Ⅰｂ式である。

25は外側の庇状の隆帯に短沈線が交互に付される。また有節沈線文が描かれ、口縁部文様帯となっている。阿玉台Ⅱ式である。

26は口縁部が矩形に肥厚し、外側は庇状である。縦位の隆帯が垂下し、この間を有節沈線文により楕円形区画文が描かれる。27は平口縁の口唇部が外側に屈曲し、平行する角押文が施される。

28～30は阿玉台Ⅲ式の資料である。28は隆帯に沿って爪形文が施される。29は有節沈線及び角押文による文様帯が構成され、区画文の結節点に円形の突起が付く。30は平口縁の突起部でここから隆帯が垂下され、

第33図　７号住居跡遺物出土状況



第34図　７号住居跡出土遺物（１）

文様帯を区画している。区画文内は集合沈線が充填される。

31は隆帯に沿うように爪形文が施される。阿玉台Ⅲ式である。

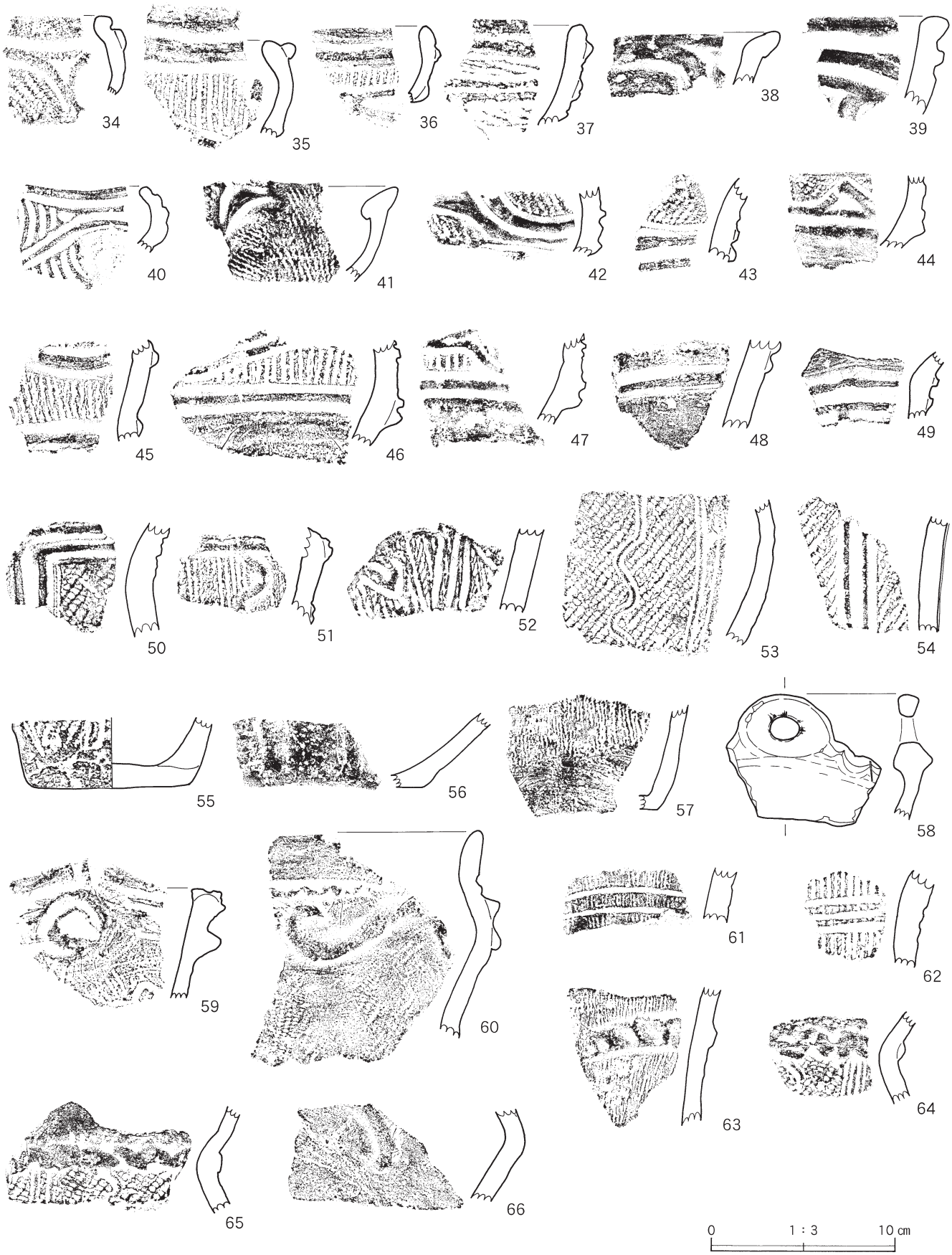
32は口唇部が肥厚し、縄文を施した隆帯が廻る。また、口縁部に斜位の隆帯が貼付され、同様に縄文が施される。地文はRLの単節縄文であるが、隆帯に沿って沈線が引かれ、磨り消し状である。阿玉台Ⅳ式であろう。

33～41は深鉢形土器の口縁部片である。33は２本隆帯が直線的に移行して渦巻文と結節し、クランク状に変化する文様である。34は弧状のモチーフの隆帯が端部で結節し、渦巻文やＳ字状文に変化すると考えられる。35は口縁部が肥厚し、口唇部は沈線状である。区画文内は集合沈線で充填される。36は地文が撚糸文であり、直線的な隆帯の結節点には小突起が貼付される。37も２本隆帯により文様を描く。地文の撚糸文は横位に施される。38、39は隆帯のみでモチーフを描く。38は口唇部から弧状に隆帯が垂下する。39は弧状の隆帯から渦巻文が派生するものであろう。40は緩い波状口縁を呈し、横位に弧状の平行沈線が廻り、三角形の区画文を描いている。区画内は弧状の集合沈線で充填される。41は口唇部が肥厚し、内外に庇状となっている。地文はRLの単節縄文である。

42～49は深鉢形土器の口縁部文様帯を一括した。42は２本隆帯による弧状モチーフの一部であり、地文は単節RLである。43は頸部と胴部の区画に平行する２条の隆帯を廻らせる。44は頸部無文帯を有し、平行する隆帯から三角形のモチーフが派生する。45は粗い無節Ｌの撚糸文を地文とする。46、47は同一個体である。２本隆帯により区画文を施し、区画内は太い撚糸文である。頸部無文帯を有する。48、49は口縁部と頸部を区画する隆帯が平行する。

50～54は深鉢形土器の胴部片である。50は頸部から垂下する隆帯と方形の区画文を描出する隆帯が結節して懸垂文となる。51は横位の隆帯から派生する蛇行隆帯である。52は３条の平行する懸垂文と沈線により渦巻文を描く。53は単節RLの縄文を地文とし、半裁竹管を用いて垂下する蛇行沈線と平行沈線を描く。54は２条の隆帯による懸垂文である。

第35図　７号住居跡出土遺物（２）



第36図　７号住居跡出土遺物（３）

55は深鉢形土器の底部で、沈線による懸垂文が施される。56は阿玉台式の浅鉢形土器の底部片である。隆帯による懸垂文が貼付される。

57も深鉢形土器の底部片である。やや内湾気味に立ち上がり、細かい撚糸文が施される。

58は中央に貫通孔を有する半円形の突起で、突起部はやや内屈する。突起から派生した隆帯が口唇上を蛇行する。中峠系の土器である。

59も中峠系の土器である。波状口縁を呈して波頂部には円孔を設け、周囲を沈線で囲む。口唇部は平坦で１条ないし２条の沈線を施す。口唇部直下には浅い集合沈線の地文を施し、横位の小波状の沈線文を描く。

60は胴部と口縁部で屈曲する深鉢形土器である。口唇直下には交互刺突文が横位に廻る。また口縁部文様帯は地文がなく、横位のＳ字状隆帯が貼付される。胴部文様帯は単節 RL の縄文のみで、口縁部文様帯と区画する施文がない。

61、62は連弧文土器の胴部括れ部付近の破片である。ともに平行する沈線が横位に廻る。

63～65は曽利系の深鉢形土器の括れ部である。63は隆帯上に円形の押圧が連続する。64、65は横位の蛇行隆帯が口縁部と胴部の文様帯を区画する。いずれも胴部には蛇行沈線、平行沈線の懸垂文が描かれる。

66は浅鉢形土器で、胴部と口縁部の境で屈曲する。文様は隆帯で描かれ、弧状のモチーフの端部が屈曲部まで達する。

８号住居跡（第37～39図、第８表）

住居跡はA3グリッドに位置する。プランは円形を呈し、長径4.8m、短径4.4m、深さ0.6mの規模である。主軸はＮ－７°－Ｅを指向する。床面はほぼ平坦で硬く締まっており、壁溝は検出しなかった。また、壁は階段状に検出され、３段に構築されている。

覆土は暗茶褐色土ないし暗黄褐色土を主体とし、ローム粒子、焼土粒子の他、特に炭化物粒子の混入が目立つ。遺物は覆土中から浅鉢形土器が正置された状態で出土した他、床面直上から浅鉢形土器が２点出土している。また、下半部を欠いた深鉢形土器を炉体土器としている。

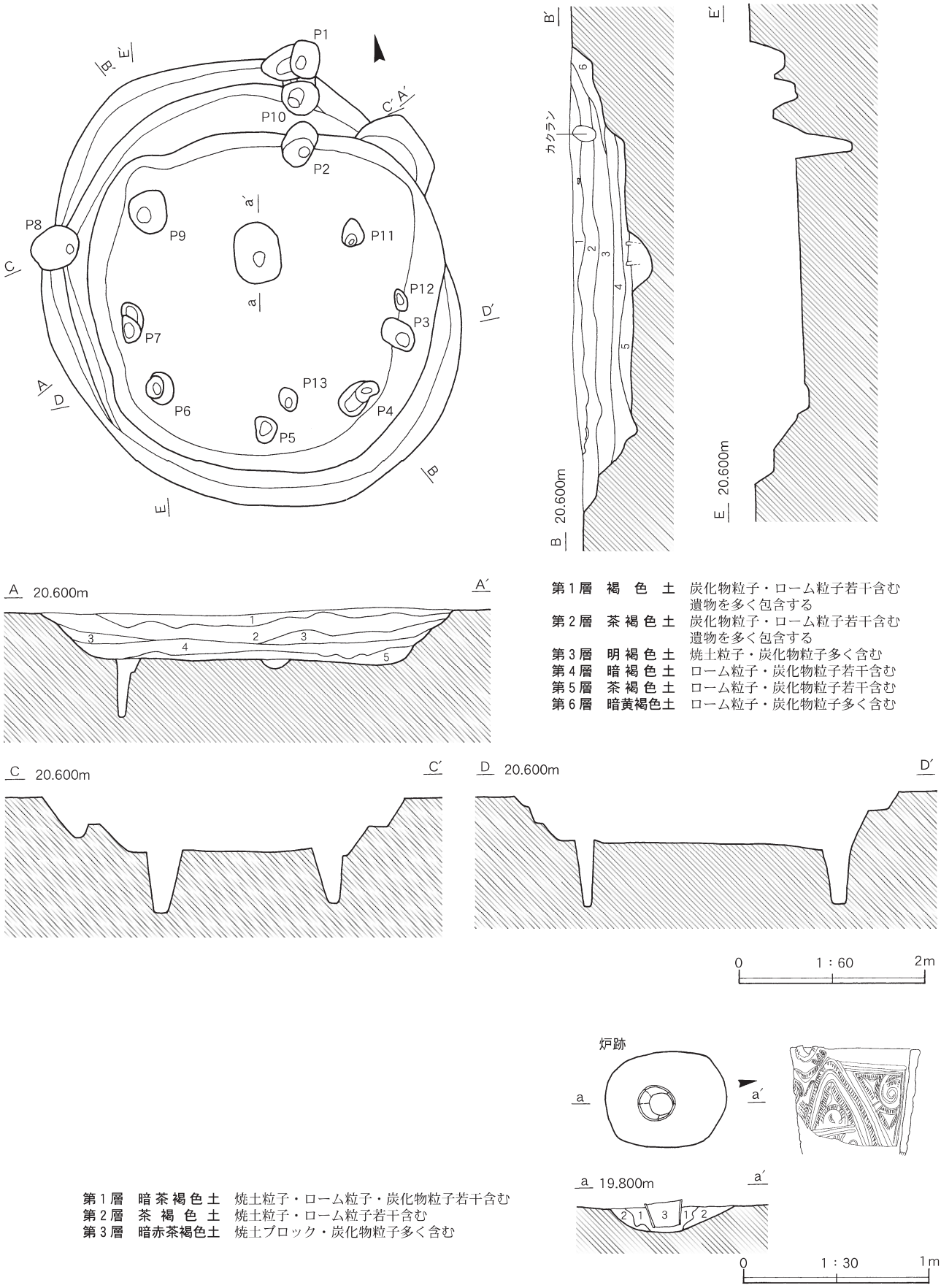
炉跡は埋甕炉であり、住居の中央部やや北寄りで検出された。炉体土器の直径は約20cmである。また炉の周囲の掘方は長径66cm、短径50cm、深さ12cmの楕円形を呈し、床面は丸底状であった。炉体土器中の覆土は焼土ブロックを多く含む茶褐色土である。主軸はＮ－８°－Ｅを指向する。

ピットは床面から13基が検出されており、このうちP1～P9が主柱穴として想定できる。また南側のP4とP6の中間にP5が検出され、この付近が出入り口であると想定される。それぞれのピットの深さはP1－53.1cm、P2－59.6cm、P3－57.6cm、P4－34.9cm、P5－57.0cm、P6－71.6cm、P7－61.9cm、P8－44.3cm、P9－65.2cmである。

炉体土器及び床面直上で出土した遺物は勝坂Ⅲ式で、併せて覆土中からも同時期の遺物が主体的に検出されており、住居跡は当該期に帰属する。

第８表　８号住居跡柱穴計測表　（単位cm）

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	64.0	53.1	P4	48.0	34.9	P7	44.0	61.9	P10	40.0	27.3	P13	16.0	12.7
P2	50.0	59.6	P5	29.0	57.0	P8	51.0	44.3	P11	32.0	54.3			
P3	38.0	57.6	P6	36.0	71.6	P9	48.0	65.2	P12	25.0	30.9			


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
カクラン
A 20.600m
A′
B 20.600m
B′
C 20.600m
C′
D 20.600m
D′
E 20.600m
E′
a
a′
第１層　褐　色　土　炭化物粒子・ローム粒子若干含む
遺物を多く包含する
第２層　茶褐色土　炭化物粒子・ローム粒子若干含む
遺物を多く包含する
第３層　明褐色土　焼土粒子・炭化物粒子多く含む
第４層　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子若干含む
第５層　茶褐色土　ローム粒子・炭化物粒子若干含む
第６層　暗黄褐色土　ローム粒子・炭化物粒子多く含む
0　1：60　2m
炉跡
a 19.800m
第１層　暗茶褐色土　焼土粒子・ローム粒子・炭化物粒子若干含む
第２層　茶　褐　色　土　焼土粒子・ローム粒子若干含む
第３層　暗赤茶褐色土　焼土ブロック・炭化物粒子多く含む
0　1：30　1m

第37図　８号住居跡

第38図　８号住居跡遺物出土状況（１）